

東寺の子院

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



検出した室町時代の客殿風建物（北から）

「弘法さん」として親しまれている東寺（教王護国寺）の北側に隣接する洛南高等学校で、校舎の建て替えにともなって発掘調査を実施しました。現在、東寺北側にある蓮池から八条通までの間は、寺域の外側といった印象を受けます。しかし、平安京造営当初は、東寺の境内に当たり、寺の各種の役所や施設が並んでいたとされています。鎌倉時代になると、ここに僧侶たちの住まいと仏堂、つまり子院が営まれていたことがさまざまな史料から読みとれます。その後、中・近世を通じ、現在も東寺北大門から北総門までの櫛笥通

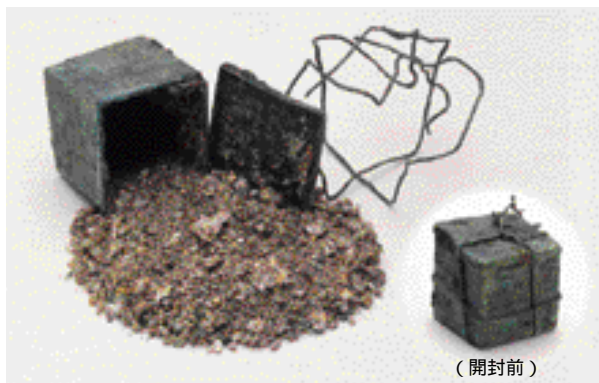
に面して宝菩提院、観智院といった子院が門を構え、往時の様相を伝えています。

調査では、おもに室町時代と江戸時代中期から後期の遺構群を確認しました。室町時代の遺構としては、調査区一帯に東西・南北方向に走る多くの溝を検出し、これらの溝によって土地が方形に区画されていることがわかりました。各区画の中には建物・倉庫や室・井戸・土壌などがあり、柵でまわりを囲っている場所もありました。この内、調査区の北西部で検出した建物は、柱穴の配置から仏間を備えた客殿風の建物で、これらの

遺構が東寺の子院であることが明らかになりました。また、この時期の遺物には、仏具と思われる蓮弁をあしらった土器、置物風の土製品や装飾品など、一般住居ではみられない豊かな精神性を示すものが多く出土しており、この地区の性格を物語っています。



置物風の土製品



銅製小箱



地鎮具（火消壺）出土状況

一方、江戸時代中期から後期の遺構群は、石垣や溝によって3つに区画されていることがわかりました。東寺には江戸時代中期に記された絵図面が残されており、そこには東寺の北側に成立した子院の位置やその名称が詳細に記述されています。下図は検出した遺構を絵図面に重ね合わせたものですが、石垣や溝が子院の境を示す線と非常によく一致しています。これによると、調査区の東半が金勝院、北西が増長院、南西が宝泉院に相当するものと考えられます。

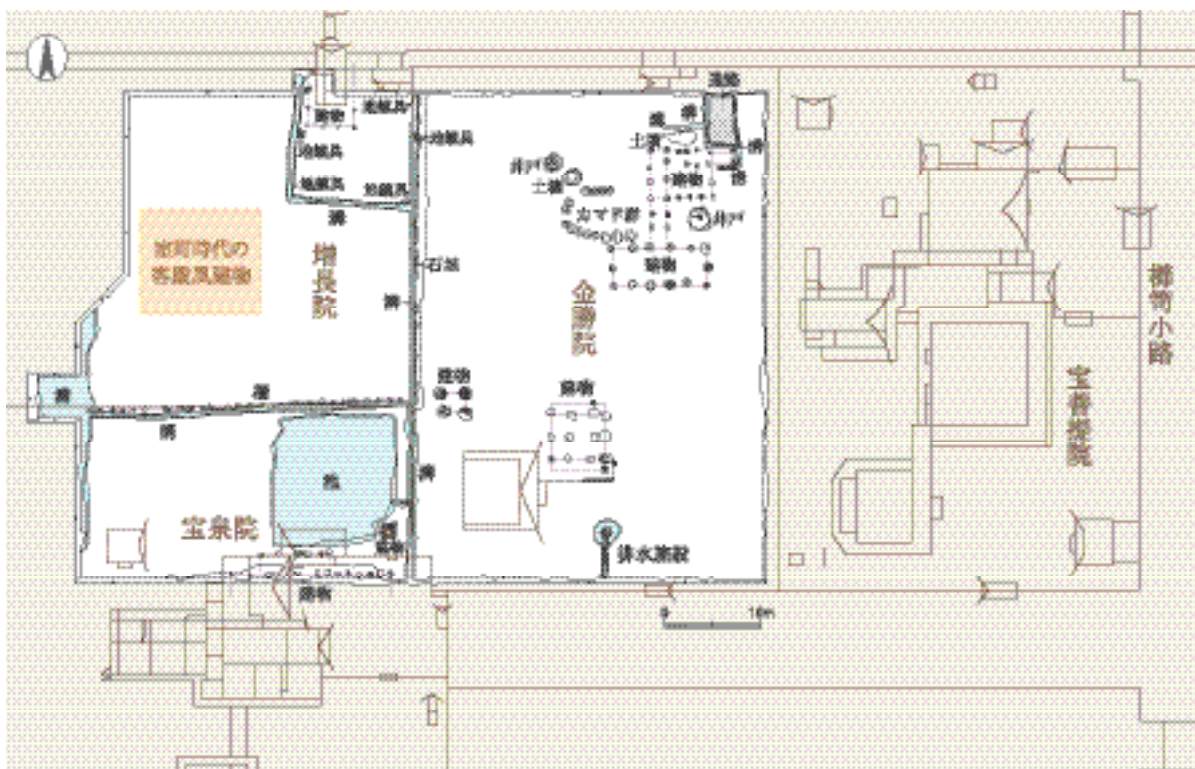
これらは発掘調査の成果と文献史料が一致した極めて希な例です。

また、今回注目できるものとして、調査区の北側で蓋付きの火消壺が、一定間隔に埋納されている状態で見つかったことがあげられます。これは地鎮のための道具と考えられます。火消壺の中は空洞で肉眼ではなにも確認できませんでしたが、五穀などが入れられていたものと推測されます。

さらに調査区の東側では、銅の針金で固く縛られた銅製の小箱も出土しています。この中には白い

砂に金箔と銀箔が混じったものが詰まっていた。おそらく真言密教で「土砂加持」と呼ばれ、地鎮や鎮壇の際の加持に用いられたものと考えられます。東寺は真言密教に関する加持祈禱が盛んであったことが伝えられていますが、これらの発見はそれを具体的に表すものとして注目できます。

今回の調査で東寺の子院の配置や変遷、そこでの生活の一端を明らかにすることができたことは大きな成果でした。（吉崎 伸）



江戸時代の東寺院家図に検出遺構を重ねたもの